

.....

うきたむ考古通信

.....

2020年2月号

■発行者	うきたむ考古の会
事務局	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 内
	〒992-0302 山形県東置賜郡高畠町安久津2117
	電話0238-52-2585 Fax 0238-52-4665

館事業報告

♥ 大人の自由研究

12月14日(土)に7月20日(土)に続く今年度2回目の「大人の自由研究」がありました。7月は参加者が2名と少なかったのですが、青苧から繊維をとる作業を行い、一定量の繊維が確保されていました。今回は大人11名、子ども1名と多くの方の参加がありました。今回も西沼田遺跡公園の渡辺淑恵先生の指導で。繊維に撚りを掛けて糸にする作業と西沼田遺跡公園で発案・製作した簡易織機の使い方の説明を受けた後、糸づくりから挑戦する方、繊維のまま織りに挑む方がそれぞれ、思い思いのコースターをつくりました。



体験の様子



糸撚作業



簡易織機で織り込み



完成

📍 第XIV期うきたむ学講座—第1回講座—

令和2年1月12日（日）に第1回講座がありました。

13時から開講式が行われ実行委員長である吉田 歎先生の開講の辞と主催挨拶があり、岩崎副委員長の進行で講座が始まりました。参加者は講師の先生を除いて20名でした。

講座①は「郷土史家伊佐早謙が残した林泉文庫について」という題で山形大学人文社会科学部教授で山形大学附属博物館館長の新宮学先生からお話しいただきました。先生が伊佐早 謙について関心を持つようになったのは、沖縄県うるま市立中央図書館が2013年に行った山形大学所蔵の旧林泉文庫の訪問調査であったということでした。沖縄戦で史資料が失われた沖縄県の研究者にとって旧米沢藩士の伊佐早謙が収集した琉球・沖縄の漢詩文をはじめとする蔵書はかけがえのない貴重なものであったのです。このことを切っ掛けとして、2017年に特別展「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文」を山形大学附属博物館・小白川図書館で共同開催すると共に、この年から山形大学附属博物館、小白川図書館、国立歴史民俗博物館、米沢女子短期大学、市立米沢図書館のメンバーによる林泉文庫に関する共同研究が始まったとのことでした。伊佐早謙は安政4年に米沢市に生まれ、昭和5年に亡くなっていますが、漢学者であり、漢詩人、教育者、郷土史家、図書館人というマルチ的な人物でした。明治の前半期には小学校・中学校の教師、明治の後半には上杉家記録の編纂に当たり、大正元年から昭和5年まで財団法人米沢図書館の第2代館長を務め、旧藩校蔵書を引き継ぐと共に市内の旧家名家から古書や珍籍の蒐集に努めるなど図書館人として活躍されたとのことでした。

没後、遺言で伊佐早が蒐集した林泉文庫のほとんどが上杉家に寄贈され「林泉文庫寄贈書及書目」され、昭和13年に上杉家から市立米沢図書館に3141部、11240冊が寄託されたが戦後になり、上杉家より購入の打診があり、市立米沢図書館では昭和28年と30年に郷土関係の1618冊を購入し、米沢女子短期大学附属図書館が昭和31年に521冊を、山形大学附属図書館が昭和30年に3706冊を、昭和32年以降に白鷹町の龍門図書館が1987冊を購入し他に未調査だが米沢興譲館高校や伊佐早家の保留分があり、古書店から県外にも流出したということですが、今、その詳細は不明とのことでした。

現在各所蔵先で旧林泉文庫の調査が続けられており、「林泉文庫寄贈書及書目」と蔵書印を手がかりとして伊佐早謙の自宅の書庫「林泉文庫」の復元が進められることになるということでした。分散してしまいましたが、これの復元には大きな意義があるとのこと、お話を締めくくられました。

講座②は「戦国末期から近世前期の土豪と村落—小国石滝村・五味沢村の両齋藤家の事例を通して」という題で徳太郎文庫の渡部眞治先生からお話しをいただきました。

先ず、小国町北部の旧石滝村・五味沢村の両齋藤家（石滝齋藤善兵衛家・五味沢齋藤惣左衛門家）に残る文書分析を通して、戦国末期から近世前期の200年間に亘る土豪の存在形態と変容過程を村という地域社会との関係の中で明らかにしていくことが研究の目的であるということを述べられました。

石滝村は大永7(1527)年9月5日の伊達氏家臣大塚信濃宛に発給された「伊達植宗安堵状案」に石瀧在家とみられるのが史料上の初見で、次いで天文22(1553)年に成立した『晴宗公采地下賜録』に「下長井白うさぎニほそや在家、(中略)小國の内、いしたき在家、(中略)各下、大塚しなの」と記され、16世紀第2四半期には他の伊達領の幾つかの在家とともに大塚信濃に安堵されていたことが分かるということです。

(表1) 齋藤善兵衛家における二男・三男の独立

NO	年代	名前	独立の状況
①	天正元年(1573年)	弟 十郎右衛門 (伊三郎・門七)	家持仕候
②	大正元年(1573年)	二男 善兵衛	越後小揚切開致候
③	元和元年(1615年)	弟 十兵衛	川向へ家持仕候
④	元和元年(1615年)	次男 七兵衛	増岡へ家持仕候
⑤	寛永十二年(1635年)	弟 三右衛門	家持二仕候
⑥	寛延三年(1750年)	弟 善五郎	家持二仕候
⑦	宝暦九年(1759年)	三男 権六	家持二仕候

(齋藤善兵衛家系図より作成)

永禄11(1568)年に齋藤伊豫安実が越後国の大島の地から嫡子であった善兵衛と名子連れて小国へやってきて、石滝村を切り開き居住するようになったということです。齋藤伊豫の父である十郎左衛門盛藤は本庄繁長の臣下で軍功により、越後村上の大島村を知行地として与えられていたということです。

石滝を切り開いた齋藤善兵衛家は名子の独立

や一族の二男、三男を分出させることによって石滝に根を張っていく様子は齋藤家系図で確認できるということです。また、戦国末期から近世初期にかけて、石滝だけでなく、越後村上の小揚や小国町増岡でも新たに開墾していくことも知ることができたということです。

近世前期の農村の生成確立過程は五味沢の齋藤惣左衛門家に残る古文書で知ることができるということです。

天明6(1786)年12月に齋藤惣左衛門が代官所に提出した古文書の写しによると①惣左衛門家は先祖より数代肝煎役を務めてきたこと。②加えて五味沢村が開かれた頃よりの肝煎であること。③文禄年中から現在まで190年あまり続いていること。④享保8(1723)年からは五味沢村の肝煎は2人体制で行ってきたが、天明2(1782)年からは再び惣左衛門一人体制になったことが記されているということです。戦国期に武士身分の土豪として村を切り開き、近世には百姓身分に変わるが、百姓との関係で優位な立場を保ちながら、つぶれ百姓問題や、力を付けてきた小農民の不満や訴えにも対応しながら、村の中心人物としてあり続けていく姿が見えるということです。

また、五味沢の生活圏内となっていた村上藩領の三面の山林管理や、氾濫を繰り返す河川管理などにも深く関与していたことを知ることができるということです。

そして、結論として①侍身分だった両齋藤家が、近世初期に百姓身分となって現在まで続く村のリーダーとして力を尽くした意義は大きいこと。②戦国末期の村の開削と近世初期の村の運営において、土豪自身が培ってきた経済力とネットワークを梃子に地域社会の中で主導的な役割を担ってきたこと。③しかしながら米沢藩の農村支配政策の遂行により、次第に自立農民が創出されてくると百姓達の発言力も増し、五味沢村でも肝煎四郎兵衛と農民達の確執が表面化してきたこと。④享保期頃を境に、米沢藩では極度に財政が悪化し、幕府へ領地返上が画策されたが、明和4(1767)年に名君上杉鷹山が登場し、疲弊した農村の復興が目指されたこと。⑤この改革の中で藩の諸々の政策を受けて、かつて土豪であった村の指導層と百姓達がそれをどのように受け止めながら生き抜いていったのか、興味ある問題であること。ということでした。そして、これらの村の維持発展の長い過程の中で培われた地域社会の仕組みや風習、家や人同士のつながり、人々の自然への対峙の仕方等が、現在でも地域社会の中に少なからず息づいていることの意義も大きいということで、

これらのことは今後の21世紀の日本社会における地域コミュニティのあり方を考える上で忘れてはならない視点のように思う。というお話で締めくくられました。



吉田委員長の開講の挨拶



新宮先生



新宮先生②



渡部先生



渡部先生②



質疑応答

◆第XIV期うきたむ学講座第3回講座のご案内

第3回講座:平成31年3月3日(日) 13:00-16:00

主催者挨拶(実行委員長) 13:00-13:10

■講座④「長井市の仏像・神像について」 13:10-14:20

長坂 一郎氏(東北芸術工科大学)

■講座⑤「長井市史編纂事業について」 14:35-15:45

岩崎 義信氏(長井市教育委員会)

閉講式(実行委員長閉講の辞・主催者挨拶)

🎧特別講演会

令和2年1月26日(日)に「旧石器時代の丸木舟製作と航海の記録—木の伐採と加工にかかる石器製作と使用痕跡の研究—」と題する特別講演会がありました。

2019年7月、台湾の東海岸を出航してから約45時間後、全長7.5メートルの丸木舟が黒潮を越えて約200キロ離れた与那国島の砂浜に到着しました。3万年前に大陸から日本列島に海を越えて渡ってきた旧石器人の航海再現するためという目的がありました。この国立科学博物館の「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」で丸木舟の製作に必要な石斧の製作、立木の伐採、丸木舟の製作にあたられた首都大学東京の山田昌久先生からお話をうかがいました。

日本の後期旧石器時代前半期といわれる時代には刃の部分をも磨いた局部磨製石斧が相当数出土していることが知られていますが、この石器が果たして何に使われたのかまだ確定はしていませんが、使用痕跡研究の成果から木の加工に使われたことは事実とのこと。刃の部分をも磨製加工して作った石斧が確認されている地は、日本とオーストラリアだけですが、現段階で大陸になかったとは言い切れないとのことでした。

一方、後期旧石器時代の斧の柄の発見例は世界中でもどこにもなく、中国や台湾での新石器時代の事例や、日本の縄文時代の事例が、現状では最古の石斧用の柄で、台湾では新石器時代晩期の芝山岩遺跡出土木器に横刃斧木柄の可能性のある木器が存在するだけという。従って、出土品から旧石器時代の石斧柄には迫り得ないということです。

中国の新石器時代の全面磨製の石斧には、日本の縄文時代のものと異なって、伐採用・製材用・加工用の3形態があることが浙江省河姆渡遺跡(丸木舟や櫂も検出されている)などで分かっているということでした。この3形態とは①刃先部分を厚く作って、伐採時の強い打撃で石斧刃に加わる圧力に対する応力を確保するもの、②柱状の片刃に作って、鋸の無い時代の打ち割り製材の割り裂き面を整形するもの、③小型扁平の片刃仕上げで、成形加工を行なうもの、の3種で、日本では弥生時代に入ることの約2800年前に漸くこの3種の作り分けが始まったということでした。

日本の縄文時代の石斧は機能的に未分化であったと考えられますが、多数の斧木柄出土例があるということです。60~70cmの長い柄から35~40cmの短い柄が発見されていて、太さも3cm弱の細いものから3.6cmの太いものまでであることから、日本の縄文時代の石斧には、肩や腰を使って大きく振って対象に強い力で打ち付けるものや石斧刃を縦方向に着装するもの横方向に着装するものが存在していたこと、さらに装着法も、屈曲台部に緊縛固定するものと、先端付近に孔をあけて挿入固定するものが存在したということです。東アジアの新石器時代の3種の石斧にどのような木柄が組み合うかについては、まだ調査事例が少ないので道具としての石斧の種類を説明する情報は不足しているということですが、僅かな事例からですが、日本の縄文時代の斧柄と同様な多様性を窺い知ることができるということでした。

考古学的に確認されている東アジアの木工技術を基礎として、3万年前の後期旧石器時代に丸木舟の製作が可能かどうか、またどのような時間がかかることになるのか、それは先史文化研究にとっても興味深い課題だったということでした。

日本ではこれまでに900点ほどの局部磨製石斧が出土しているが、河原で打ち割った大型剥片を素材としているため、刃は厚くないのが特徴で、中国や台湾の新石器時代や日本の弥生時代の石斧に比べれば確かに薄いのだが、縄文時代の石斧に比べた場合、長さ14cmほど石斧の厚みは決して薄くはない。刃部磨製の石器には10cm以下や5cmほどのものがあり、本来、一つの器具の刃先であったとすることはできないということでした。

丸木舟用のスギの大径木の伐採実験は、当初は所属する大学の研究として始まり、実験では以前から別の施設を作るために探していた石川県の直径1 m程のスギを伐採したということで、2017年の9月に6日間かけて伐採が行われ、結果的に36000回近く斧を打ち続けて、伐り倒すことができたということですが、この数字はまだ、後期旧石器時代の石斧の効力を示す数値ではないということでした。石斧刃は折れやすく、最高に長持ちした復元品で5000回ほどの打撃に耐えるものだったということでした。この実験で明らかになったことは、しっかりと復元ができれば、後期旧石器時代の石斧でも木材の伐採が可能であるということだそうです。また、出土品を観察すると、その固定部分(基部)の形は、非常にそろっていることが確認できたので、木柄に固定することが十分に配慮された刃先づくりが行われていたと考えられたということでした。

つぎに木舟に仕上げる削り抜き作業は東京のキャンパスで行われ、長い柄を持つ横刃斧と縦刃斧での粗削り作業だったということですが、延べ20日の作業で、丸木舟の形がほぼ出来上がったということでした。伐採時には縦刃の斧が作業姿勢に無理がなかったので活躍したが、削り抜き作業でも、縦刃の斧は使用できたということですが、内側の削り抜き作業の湾曲面を作り出す際には横刃にした斧が活躍し、柄の長さが短い斧が必要だったということでした。そして、短い石斧は、伐採時に使用した斧よりも柄が太い方が、握りが安定して、作業がし易かったということでした。

2018年9月28日には、千葉県南端部の東京海洋大学の実験フィールドに移送して、海に浮かべて航行しては微調整をする段階に入ったということ、舟体を薄くしバランスを確認しながら舟底部で5 cmほど側縁部では3 cmほどの厚さに仕上げ最終的には火で焦がしてささくれをとったということでした。

その後、航海実験出発地の台湾烏石鼻に移送され、2019年5月26日から最後の調整加工や漕ぎ手の座席を設定し、丸木舟の前後に波除をつけ、さらに、5~6名の漕ぎ手による移動することができる重量にすることも考慮され、水分を含む割合で舟の重さは変化しますが、350 kgを切るまでに軽量化されたということでした。

さて、このように仕上げられた丸木舟は2019年7月7日正午に台湾南東部の台東長浜郷の烏石鼻港を出発し、5人の漕ぎ手が交代せずに全航路を漕ぎ9日午前11時過ぎに日本の沖縄県与那国島に到着した。これは、旧石器時代の人類が黒潮を越える能力を持っていたことを間接的に証明するものとされました。

しかし、黒潮を横切るという航海には成功したものの、つぎのような課題が残されたということです。



山田先生



講演会の様子

実際に復元品を作って伐採や丸木舟の削り抜き製作を行ってみると、固定強度が安定できずに、石斧刃石器が折れたり、刃がかけたりすることが頻繁に起こったこと。

しかし、日程の決まっている航行実験に合わせて丸木舟は作らなければならなかったため、途中から伐採から削り抜きまでの作業の中心となった雨宮さんの考えた丸木舟の加工に即した石斧を使って、加工作業をすることを選択せざるを得なかったこと。

このため、実験に使っている石斧は後期旧石器時代の斧でないという声が、インターネット上で広まったことは真摯に受け止めなければならないこと。

後期旧石器時代の石斧とその柄の復元研究は、まだ完成してはいないが、現在も海部先生を代表者とする研究活動で、根気強くその研究は継続されており、固定部分がうまく復元できれば、刃先は十分に木材の加工が可能な強度は持っているため、柄の長さや太さを変えて、固定構造を修正していけば、後期旧石器時代の石斧の実態にたどり着けることだろう。と締めくくられました。

また、今回の丸木舟製作実験には伐採に6日間、削り抜きに20日間を要していますが、動物を追い求めて遊動生活をしてきた後期旧石器時代前半期に1ヶ所にこれだけの期間逗留し得たかどうか、当時の生活状況の中でこれだけの余剰時間が取れたのかという、問題もあると思いますが、今後の研究の進展に期待すると同時に、成功の暁には、再びお話をうかがいたいと思います。

🗨️ 2019年度山形の考古資料検討会のご案内

例年同様、今年度も山形考古学会と共催で開催いたします。今年は（公財）山形県埋蔵文化財センターの調査はありませんでしたが、米沢市、南陽市、高畠町で調査が実施されています。


現在、報告遺跡について検討中ですが、下記の要項で開催いたします。多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

1. 事業名称 山形の考古資料検討会
2. 開催期日 令和2年2月9日（日）午後1時30分から午後4時00分
3. 開催趣旨 令和元年度に県内で行われた発掘調査やこれまでに発掘された資料について関心を高めるとともに、考古学の進展、文化財保護の気運の醸成をはかることをねらいとして開催するものである。
4. 会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 研修室
5. 主催 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
6. 共催 山形考古学会
7. 参加費 500円

東北情報館

 コレクション展『米沢藩 武士のお仕事—戦士・役人・芸達者—』

入館料 一般／210円 高校生・大学生／110円 小・中学生／50円
1月11日～3月22日 米沢市上杉博物館 TEL: 0238-26-8001


 企画展『ふくしま鉄ものがたり—鉄滓の山から読みとく歴史—』

入館無料
2月1日～3月29日 まほろん TEL: 0248-21-0700

 企画展『弥生時代後期の北越と北陸・長野との交流

—天王山式土器から考える—』

入館無料
11月6日～3月29日 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 TEL: 0250-21-4133

 企画展『山と生きる—太平山の信仰と人々の暮らし—』

入館無料
12月7日～4月5日 秋田県立博物館 TEL: 018-873-4121

 第27回埋蔵文化財展『北上の発掘30年

—北上市埋蔵文化財センター設立30周年記念展—』

入館無料
2月22日～3月22日 北上市立鬼の館 TEL: 0197-65-0098

 テーマ展『一関藩主田村家の文物』

入館料 一般／300円 高校生・大学生／200円 中学生以下／無料
1月25日～3月22日 一関市博物館 TEL: 0191-29-3180